

年の山西洪洞縣志は「成化八年の田土に沒官田一畝五分、每畝糧二斗四升七合、沒官水地三頃三十九畝每畝糧二斗三升一合、沒官平地十一頃二十六畝、每畝糧

一斗八升五合、沒官坡地七十四畝、每畝糧一斗二升三合、沒官灘地二頃六畝、每畝糧八升二合、沒官鹽地五畝每、堡八升二合」と傳へて居る。(一九二・三・一七)

批評及び紹介

パウル・ペリオ氏 敦煌千佛洞圖録

Mission Pelliot, I. Les Grottes de

Touen Houang.

Tome Premier, Grottes; I à 31.; Tome

Second Grottes 31 à 72.; Tome Troisième,

Grottes 72 à III.

本書は Paul Pelliot 氏が一九〇六年より一九〇九年に互りて 東部中央亞細亞に學術的探檢旅行を試み、特に敦煌地方に至りてその地の千佛洞内より蒐集したる考古學言語學史學宗教及び哲學等各種の貴重なる莫大なる資料を整理し、その研究報告と併せ

て一大集録を公刊せられんとする計劃の最初をなすもので、主として千佛洞内の壁畫彫刻及繪畫文書の複製圖録で今は第三集まで刊行せられ、第四集も刊行の準備既に成るといふ事である。頃來予は Pelliot 氏の厚意に依り、本書の刊行毎に此の有益なる圖録を寄贈せらるゝの榮を得たるが故に、茲にその大要を紹介して同氏の厚意に酬むたいと思ふのである。天山南路及び敦煌沙州の地は漢唐の間久しく東西交通の要衝に當たり、交通に伴ひて此の地に傳はり來つた東西の文明は特種の文明を後世に遺したること

は今更に呶々の言を要しない所である。而して此れ等の古代文明の遺物を久しく沙中に埋藏して、今日より尙ほ文献上に傳ふに至らなかつた當時の状態を窺知し、史實の缺けたるを補ふことを得るは、全く此の地方特別の風土氣候と流沙の特種なる働きによるといふも過言でない。然し東西陸路の交通は第十三世紀元代以來の引つゞいて起れる内陸地方の動搖と海上交通の發達との爲めに閉塞せらるゝこととなり、往昔盛んであつた此の地方の文化状態は殆んど世人の記憶より遠かりて注意するものもなき有様であつた。第十九世紀の中頃以來漸く東洋學が勃興し内陸地方の古代の史實が知らるゝに至つて次第に學者の注意を引き、殊に一八九〇年に Power 氏が庫車附近の沙磧中より貝葉經卷の斷片を發掘してより類る世人の注目を惹き、此の沙磧中に古代文明の遺物の多くのものを包藏せられてゐる事を想像する事となり、遂かに學界の注意を喚起することとなつた。

茲に於て一八九四年以來各國の學者探檢家競ふて遠征を試み専ら遺物の蒐集に努るとなつた。就中 Kozloff, Klementz, Grünwedel, Le Coq 等の獨逸・露西亞の考古學者は何れも數回に互りて庫車・吐魯番地方に學術的探檢發掘に従事し、我が國も大谷伯の探檢あり、各々莫大の貴重なる遺物を齎らし歸り學界に提供して學者研究に資するに至つたことは顯著な所である。最近 Oldenburg 及び Le Coq (第二回) 兩氏の探檢も行はれ、各々探檢の報告書及び蒐集したる文書繪書の圖録も隨時に發刊せられ特種の研究も逐次公にせられたものが少なくなさ。Le Coq 氏の "Chokho" Grünwedel 氏の "Ale Kutscha" 及び Oldenburg 氏の報告は何れも特色あり貴重なる價值あるものである。此に對し、英國の Annel Stein 氏は一九〇〇年以來前後四回に互りて、如上諸學者が専ら北道諸國の古蹟を探究するに反し、氏は南道諸國の遺蹟を探り、第一回には古代千闐の發掘をなし

一九〇六年より一九〇八年に至る第二回目には鄯善の故地より敦煌沙州に至り、古長城の跡を究めた。千佛洞より莫大の古書を得たのは實に此の時のことであつた。第三回目は一九一三年で庫車吐魯番より玉門地方に至る古道の跡を究め貴重な資料を得られた。同氏の *Ancient Khotan, Desert Cathay* 及び *Serinda* の著は實に此れ等探検の結果であるが、同氏蒐集の特種の研究を要する古文書古記録は別に學者の研究に委し、逐次に公けにせられてゐる外、別に此等の一大圖録も近く研究報告と共に公刊せられる筈である。而して Pallot 氏の探検は Stein 氏と相前後して行はれたもので、千佛洞に於ける氏の探検は特種の價值あるものといふてよいのである。Pallot 氏の千佛洞探検は實に一九〇八年のことであつた。その事實は已に學界周知のことであるから茲には簡單にその由來を述べるに止める。千佛洞の位置は甘肅省敦煌縣の東南約十五軒にある三危山の

盡る所の鳴沙山下にある。洞は一小流に洩み上中下の三精舎があつて、往昔は三界寺の名もあつたが、寺側左右の斷崖側面に大小千餘の石室洞窟が刻まれ鑿穿せられてゐる。その造作せられたのは第五世紀より第十一世紀、即ち六朝末期より唐宋末初に至つてゐる。唐以後専ら莫高窟として呼ばれ、千佛洞はその俗稱である。石室には佛殿多く又單なる佛龕となるものもあるが、何れも壁面は一面に繪畫を以て裝飾し、曼荼羅、諸佛菩薩などの佛畫を以て覆ふてゐるから此の内に古代の貴重な遺物の包藏せられてゐる如きことは何人も想像し得なかつた所である。然しこの石室中より遺物の發見せられたことは決して新しいことではなく、已に百餘年前より多少共に發見せられてゐたのであるが、未だ嘗て此の内に古書古文書の夥多なる數の藏せられてゐることは何人も思ひ及ばざりし所であつた。然るに一八八五年(光緒十一年)石室修理に當りて壁面の陥没より端なくも

古經卷の埋藏せらるゝことが知られ古書冊の發見せらるゝものが少なくなかつた。Stein 氏が此の地方に至るに及んで此の事を傳聞し、直に千佛洞を尋ねてその一部を發掘し得たのである。Pellicot 氏も亦一九〇七年新疆地方に探檢旅行の途迪化府に至りて將軍所持の石室本を見て初めてその事實を知り宗室載瀾や安西州知某より石室本を得るに至り、茲に唐代古寫本の多く匿藏せらるゝことを確かめ、Stein 氏に稍々遅れて千佛洞に至り多くの古書古記録を發見蒐集することを得たのである。かゝる有様であるから Stein, Pellicot 兩氏の蒐集し得た所には多少の出入得失はあるが互に相異つた點が少なくない、即ち Stein 氏は主として古經卷を——漢譯佛典疏鈔類は勿論、各種東洋語にて譯せるものをも含みて——蒐集し、Pellicot 氏は古書籍類古典の古寫本を主としてゐる點であるが、又各種の古畫をも得たことは兩氏共に同様である。Stein 氏は此等を各種學者の研究に委し

パウ・ベリオ氏敦煌千佛洞圖録

て隨時發表せられてゐるが、Pellicot 氏は Chavannes, Gauthiot, Lanier の諸氏と共同にて研究せる所を己に發表したものが少なくない。斯様の次第であるから Pellicot 氏の蒐集は Stein 氏の蒐集と合せて初めて完全なるを得るものであるが、今や兩氏共にその蒐集する所の資料を纏めて各別に公刊せられんとするは學界の爲めに喜ぶべきことで、本圖録はその點に於て最も價値あるものといはねばならぬものである。

さて千佛洞は東部亞細亞に於て稀に見る貴重なる考古學上の寶庫の一であつて、Pellicot 氏の蒐集は其三分の一に過ぎぬと云はれてゐるが、その含む所は頗る廣範に互り、あらゆる學術に及んで網羅されてゐる。その報告研究も己に述べた如く隨時己に公にせられたものは少なくないのであるが、全般にわたりの一大集録は實に這回同氏によりて計劃せられた所に依りて完成せらるべきものである。即ちその集録は千佛洞の彫刻繪畫壁畫等の遺物紀念物の複製

第一卷 四四七

より、支那の經書及び史・子・集の古寫本、佛教及びその他の經卷の古寫本、或は古文書、梵語・吐火羅語・ソグド語・龜茲・于闐語・西夏・西藏文字・東方イラン語・トルコ語・蒙古語等各種の經卷を含めるもので此れ等の言語學上の研究報告、譯註、文書寫本の複製、その譯註は勿論、或は歴史・地理・宗教・哲學・考古學等各般の研究一切を網羅するものであるから、その完成するに及んで一大叢書をなすものといはねばならぬ。かゝる貴重なる計劃價値ある刊行物は他に比類なきもので、氏の此の計劃に對して甚大なる歡喜を禁ずるを得ざる所て、その完成を深く期待するものである。今同氏の記する所によりてその計劃の概要を擧げて見るのも無益のことではなからふと信ずる。

Pelliot氏は本叢書の完成を一時に期待するものではない。同氏の計劃は先づ蒐集した全資料を學界に提供して各専門の學者の充分なる研究を要求するも

ので、學者は各々自ら得たる原則を以て完全なる研究の解放を行ひ、その結果に對して充分なる責任を恪守するものでなければならぬことは云ふまでもない。此の種の研究は一定の時期を限ることを得ないが故に、その成るに隨ひて刊行して一部の叢書を造ることとなるのである。従つてその題目及卷數は豫め嚴格なる立案を與へ定めることは無益のことに屬することとなる。成るべく豫めの順序は設けない。但し問題の種類によりては種々の異なる型式を取らねばならぬから、本叢書は數種のセリリスに分ち各セリリスによりて卷數順序を附することとなる。その種類は大體二種となる。即ち、クオルト型のセリリスは繪畫彫刻等圖寫せる紀念物の複製圖版を主とする。オクターヴォ大型のセリリスは文書の模寫及びその解説・考證・研究を充てる筈である。言語學上の研究、小型原本の複製はオクターヴォ型セリリス

に収録せらるゝ筈である。クォルト型セリース中には Pellot 氏の伴へる故 Charles Nouette の撮寫せる千佛洞に於ける各種の寫真圖版を複製収録するもので、本圖録は實に此の種類に屬するものである。オクターヴオ大型セリースには第一卷にソグド語及び漢文の文書を採録しその模寫と驛註及び語彙を添附する。唐代僞經と稱せられる善惡因果經のソグド語及び漢譯もこの内に入れられる。こは Gandhok, Pallor 兩氏の協同研究に成るものである。第二卷には Haokin 氏の分擔に係る梵語西藏佛教々理書及その翻譯を收める。この二卷共に目下印刷中にして近く刊行せらるべき豫定である。今予に寄贈せられたるものは、此等のクォルト型千佛洞の複製圖録で、Nouette 氏が激烈なる努力を以て不良の氣候と戦ひつゝ撮寫せし貴重なる寫眞の圖版で、千佛洞の全景石室一部の實況、石室の裝飾、壁畫及び彫刻をステロー板となせるものである。第一集は石室第一號よ

り第三十號石室に至る六十四枚の圖版を收め、第二集は石室第三十一號より第七十二號石室に至る六十四枚の圖版、第三集は第七十二號石室より第一百一號石室に至る六十四葉の圖版を收め、三集百九十二圖に及び、總べて第一號より第一百一號に至る千佛洞石室内壁面の裝飾及び壁畫と佛菩薩の塑像とである。此れ等は何れも唐代・五代・宋初に互るもので、中には宋の中期以後とも考へらるゝものがあるが、又六朝時代と思はるゝものもある。殊に北魏の年紀せられた壁畫ある石室もある由であるが、その包藏の遺物の年代より考へて、Pellot 氏が石室封鎖の年代を宋仁宗の景祐年間吐蕃の侵入の結果とするよりも尙ほ以前少なくとも宋初に封鎖隠蔽せられたらしく壁畫は即ちその頃のものが最も多いと見ねばならぬその圖様は曼茶羅(變相圖)最も多く、彌勒上生經による彌勒曼茶羅、藥師經の藥師曼茶羅、釋迦佛の曼茶羅及び彌陀經による淨土曼茶羅がある。又十方佛

釋迦本生譚、諸佛菩薩像、供養者の像の如き見るべきものが少なくない。此れ等は唐代佛教藝術の貴重なる紀念物で、たとへ中央部に於ける如き秀拔なる藝術的價值あるものは少ないにしても、將來に發表せらるべき石室發見の絹紙本の繪畫と共に佛教藝術の研究上大なる貢獻をなすべき貴重なる資料であることは贅言を要しない所である。吾輩は此の貴重な圖録の完成は勿論、價值ある全叢書の完成公刊せられん日を期待してやまないものである。左に目錄の概要を掲出して、その内の顯著なるものに就いて二三の紹介を試みることにする。

第一集

第一圖乃至第七圖 千佛洞全景

第八圖乃至第十一圖 第一號洞内壁畫及佛像

第十二乃至第十四圖 第六號洞内壁畫

第十四圖の男女の供養者の像は特に注意すべきものである。

第十五圖乃至第三十二圖 第八號洞内壁畫及天井の装

飾

繪畫は頗る盛んなるもので腰以下に描ける菩薩の圖の如き又風俗に關する如きは頗る價值あるものである。

第三十三圖乃至第三十六圖 第十二號洞内壁畫

唐若くは宋初の畫と見るべき壁畫の上に宋の中期以後に描かれたと思はるゝ人物像あり。

第三十七圖乃至第四十圖 第十四號洞内塑像及び壁畫

第四十一圖 第四十二圖 第十六號洞壁畫

第四十三圖乃至第四十九圖 第十七號洞内壁畫

これには宋初貴人の騎馬行進の圖がある。一方には宋國河内郡夫人宋氏□行圖の銘がある。歌舞技樂の様をも描いてゐる。

第五十圖 第五十一圖 第十八號洞内壁畫

第五十二圖乃至第六十四圖 第十九號洞内壁畫

淨土曼荼羅の圖を描く但し其の時代は宋以後のものやうである。

第二集

第六十五圖 第十九號洞壁畫の一部

第六十六圖乃至第六十七圖 第三十一號洞内の壁畫

第六十八圖 第六十九圖 第三十二號洞入口兩側壁男

女供養者の畫

第七十圖 第七十一圖 第三十三號洞内壁畫の一部

第七十二圖 第三十四號洞左方壁畫の一部

第七十三圖 第七十四圖 第四十一號洞内壁畫の一部

第七十五圖 第四十二號洞右側壁畫の一部

佛像一體を描く、手法自由にして古拙の風あり。

第七十六圖 第七十七圖 第四十四洞及左側壁畫及塑像

第七十八圖乃至第八十一圖 第四十六號洞左右壁畫

第八十二圖 第四十九號洞内奥底右隅の塑像

第八十三圖 第八十四圖 第五十一號洞内佛龕及び左

右壁畫

壁畫は比較的新しき時代に描かれたものゝやうである、特に下部の供養者の服装は注意すべきものと考へられる。

第八十五圖乃至第九十二圖 第五十二號洞内壁畫及び

型像

壁畫は頗る盛んなるものにて、その下部に第三十

二號に描かれた者と同様の着冠持香爐持笏の男子

盛装の女子の多數の像がある。勅河西羅右伊西庭

樓閣云々の銘がある。宋初のものゝ考へられる。

第九十三圖 第九十四圖 第五十三號洞左右側壁畫の

一部

第九十五圖 第九十六圖 第五十三號洞内壁畫及び塑

像

第九十七圖乃至第九十九圖 第五十四號洞内佛像及び

壁畫

第九十七圖の入口左方壁龕中の入定の塑像は頗る秀拔なる作である。

第一百圖乃至第一百三圖 第五十八號洞内左右壁面繪畫

正面佛壇右方佛壇の彫像

第一百圖に婦人折膝供養圖がある、左壁前方のもの

でその手法特に優秀の作である。

第一百六圖 第六十一號洞内佛壇右方の壁畫

四天王像である。宋初の作であらふ。

第一百七圖 第一百八圖 第六十二號洞内左右側壁畫

第一百九圖 第一百十圖 第六十三號洞入口の墓碑、佛壇

第一百十一圖乃至第一百十四圖 第六十四號第六十五號内

壁畫

第一百十五圖 第一百十六圖 第六十六號洞内壁畫及び佛

像

第百十六圖の供養婦人の圖は第三十二號洞の婦人と同じ服裝にて西方特別の風俗を示すものである

第百十七圖 第六十七號洞内奥底の佛壇

第百十八圖乃至第百廿五圖 第七十號洞内壁畫

右の中第百廿五圖は佛壇右方の壁畫で菩薩像であるが、特に注意すべきは全く印度風の繪畫であることにある。第廿四圖には婦人騎馬舞樂を觀る圖がある。

第百廿六圖 第百廿七圖 第七十一號洞内壁畫及び佛像

此の佛像は頗る優れた作で唐代のものと考へられる。

第百廿八圖 第七十二號洞内の壁畫

第三集

第百廿九圖乃至第百卅一圖 第七十二號洞壁畫

第百卅二圖乃至第百四十九圖 第七十四號洞壁畫

此の壁畫は淨土曼荼羅を現はし、壁面下部には冕冠冕服を着た男子が夫人女子を隨へて供養する圖を描いてゐる、その端に于闐國大聖大明天子とし

てあるから、于闐王の供養の様を描いたものであらふ。

第百五十圖乃至第百五十三圖 第七十六號洞内壁畫及び佛壇

羅漢圖を描き手法頗る拙劣、恐らくは宋以後のものであらう。

第百五十四圖乃至第百五十七圖 第七十七號洞内壁畫

十方佛を描き、上に四方佛を配してゐる。

第百五十八圖乃至第百六十一圖 第七十九號洞内壁畫

第百六十三圖乃至第百六十八圖 第八十一號洞内壁畫

第百六十九圖乃至第百七十二圖 第八十二號洞内壁畫

第百七十四圖乃至第百七十六圖 第八十四號洞内壁畫

第百七十七圖 第九十七號洞内佛壇

第百七十八圖乃至第百七十九圖 第九十九第一百號洞内壁畫

内壁畫

第百八十圖乃至第百八十五圖 第一百二號洞内壁畫

釋迦傳諸佛名を描くも頗る西藏風の傾向あり圖も亦後世の作なるが如き感がある。

第百八十六圖 第一百三號洞内壁畫

第百八十七圖 第一百四號洞内壁畫

第百八十八圖 第百八號洞内壁畫

第百八十九圖 第百九十圖 第百十號洞内壁畫

以上の五圖の畫風は頗る調子を異にしその年代比較的古きものゝ如く、唐宋時代の支那畫の風がな
い、百八十九及び百九十の二圖は特に著しきもの
がある。

第百九十一圖 第百九十二圖 第百十一號洞内佛龕の
彫像

此の彫刻佛像は如上のものと同然趣を異にして雲
崗龍門に見る北魏藝術の跡を著しく現はせるもの
で、千佛洞石窟中の最古のものに屬するやうであ
る。佛龕の彫刻も亦た著しく北魏のものと同一致す
る所が多く、總てに乾陀羅風の調子を著しく認め
られるものである。

(白鳥庫吉)